

## 「ひがしまち街角広場」における居場所づくり

ひがしまち街角広場運営委員長 赤 井 直

「おはよう、もういい？」と云って、人が入ってくる。午前10時過ぎ、開場準備のためスタッフが鍵を開けたところだ。「湯が沸いていないからしばらく待ってて？」と云いながら会話は始まる。ここはゆっくりゆったり人と話をする事が主な目的である。時間そのものを気にする習慣はあまりない。

今日も「ひがしまち街角広場」(以下“街角”)の開場はいつもと変わりなく10時半だった。でも地域住民交流の場として、“街角”開場の決まりは月～土、11:00から16:00となっているのだが。

### 新千里東町の30年

街角広場ができるきっかけについて述べておこう。2000年、当時の建設省(現国土交通省)が「歩いて暮らせるまちづくり」をテーマに全国20地区をモデルプロジェクトとして選定し、新千里東町がその一地区として指定された事にある。

その事業は行政、学識経験者、地域住民で調査検討委員会が組織され進行していくこととなった。私も住民代表の一人としてその調査検討委員をつとめた。その委員を受けるにあたり、作成する報告書に挙げる内容について地域還元すべきと主張した。

千里ニュータウンは本年46年目を迎えた。昭和30年代の高度成長期、大阪にも人口が集中した。大阪府はその対応の一環として都心から15kmの千里丘陵に日本最初の大規模ニュータウン造成を計画した。

千里ニュータウンは一住区約100haで吹田市8住区、豊中市4住区で構成され、人口13万人の相当な街であり、各住区には近隣センターが配置され生活環境は保障された楽園であった。入居当初は狭い都心のアパートから憧れの団地に入居し、夢いっぱいであった。ステンレスの流し台、タイル張りの風呂。中でも鉄筋コンクリート造りの住宅で鉄のドア。しっかりした錠で生活の安全が確保されたお城であった。高度成長期の企業戦士たちは、家と職場の往復の生活が始まっていた。家は「ねぐら」であり、地域コミュニティも未成熟なまま推移していた

が、「学校」があった。生活スタイルは多様であるが、数年でほとんどがPTAの会員になっていった。こんな事がベースとなり自治会組織との交流も活発になった。

子ども達が成長し、独立する時期となると3世代同居ができる「家」ではなかった。町内には民間の賃貸住宅もなく、結果ニュータウンを離れざるを得ない現実と対面する住民が増えていた。入居一世のみがまちに残り、30数年経ったまちは緑多い落ち着いたまちに成長した反面人口減少と高齢化が進行していたのである。入居時に30歳代から40歳代が主流であった住民はすでに60歳代半ばを超えていた。小学校の生徒数は1976年の1458名をピークに「歩いて暮らせるまちづくり」時には最小163名にまで減少していた。

住宅・施設は老朽化や生活スタイルに合わなくなって、不自由を感じるが多くなり、分譲マンションでは建て替えの方向で話し合いがまとまり実行段階に入りつつあった。

### 「ひがしまち街角広場」の誕生

この高齢化したまちをどうすれば人々が交流し、支えあいながらいきいき暮らせる住みよい町に出来るか、調査検討委員会では住民の協力の下アンケート・ヒヤリング・ワークショップをし、住民と一緒に考えていく事とした。結果次のような3つの方向と7つの提案にまとめた。

#### ◎3つの方向

- ① 多世代住宅の供給
- ② 交流・活動空間の整備
- ③ 交流・活動の組織・仕組み・拠点づくり

#### ◎7つの提言

- ① 多世代住居のための多様な住宅を作ろう!
- ② 学校をコミュニティの場に活用しよう!
- ③ 近隣センターを生活サービスと交流の拠点にしよう!
- ④ 千里中央を地域の生活・文化の拠点にしよう!

- ⑤ 公園を緑の交流拠点にしよう！
- ⑥ 緑道を人々の出会いのある生活・交流軸に育てよう！
- ⑦ 交流とまちづくりの組織・仕組み・拠点を育てよう！

これをもとに豊中市が社会実験として6ヶ月の期間限定で空き店舗を確保し、地域にその運営が任された。早速その旨を地域に広報し公募で集まった約30名で実行委員会を結成した。第1回目の会合で「ひがしまち街角広場」と命名し、開設を10日後、住民交流の拠点とすることのみ決定したが、内容は流動的であった。当地域には落ち着いて話のできる場所がなかった。まず、この条件を満たそうとコーヒーなどの飲み物を提供し、後は反応を見ながら運営していく方針で2001年9月30日に“街角”が開設された。

町が開かれた当初、日常生活品の購入は近隣センターが主であった。1970年代になると、北千里や千里中央に大型商業施設が出来、車社会が到来、「一住区一業種」の規制がなくなり商業形態が変化してきた、住民の意識は近隣センターから地区センターへと移っていった。

もう一度近隣センターに目を向けてもらえるだろうか、“街角”はどうか動き出したが、先は全く見えていなかった。どうにかなる、日々の運営の中から必ず道が見え、地域の変化をつかみだせるかもしれない。この様な淡い期待で始まった。

開設時から“街角”に必要なものは可能な限り近隣センターで調達している。

#### 「ひがしまち街角広場」開設当初は

不安を背負いながら地域の期待をポジティブに受けとめ、“街角”は開設された。現在もそうだがスタッフは全員ボランティアであり主婦が中心だ。オープン時間の11:00から16:00が許容される所以でもある。

開設当日は雨となり心配されたが、興味本位も手伝い大勢の人でにぎわった。

目的は住民同士の交流であり、そのための喫茶スペースの確保。会議、打ち合わせ用に時間外の貸し出しにも応じると決定した。

##### i. 行きやすい場所に…

大型店舗が存在する駅前商業施設に住民が魅力を感じてしまい、近隣センターは興味の対象から外れ、高齢者は家で過ごす事が多くなっていた。

一定時間帯には常に開いている“街角”は次第にその主旨が伝わり、「気軽に、誰でも行ける場所」「自由に話しながらコーヒーなどを楽しめる場所」となり、「行きつけの場所」となっていった。

##### ii. 地域交流のきっかけ…

来訪者の中には、転居後間もない人で地域の事情がわからなく困っていた人もいた。“街角”でボランティアスタッフや来訪者同士の会話から地域での自分自身の居場所・活動場所を見出した人もいる。又、長年住んでいたが、職場と家との往復のみで、住区のことを解らなかった人がその課題の解決にもつながった。

##### iii. 多世代交流の場所に…

小学生が下校時に立ち寄り、喉の渴きを癒し、居合わせた人と交流を持つようになった結果、道で出会ったときも挨拶をかかわるようになった。又、宿題を“街角”でする子どもがおり、それを手伝う人もいる。一緒にゲームに興じたり、謎掛け遊びをしているが、不都合な時は叱られ、行儀や言葉使いも地域の大人に教えられている。

子どもが囲碁を習いたいとの申し出に、囲碁教室が出来、現在では「子どもの居場所づくり」の大切な場所となっている。又「子ども見守り隊」の休憩場所ともなっている。

##### iv. 安心できる場所に…

核家族が多く、両親が昼間留守の家庭が多いが、子ども達の居場所にもなっている。怪我した時、喧嘩の時の仲裁など子どもから求められることは多様であるが“街角”を活用することで課題の解決につなげた事例は多々ある。

高齢者にとっても同様であり、病院情報、介護の仕方など、話題と情報の宝庫となっている。



写真—1 高齢者と子ども達

## v. 地域活動拠点…

地域活動の拠点は「新千里東町会館」、学校の空き教室利用の「東丘コミュニテールーム」と各住区の「集会所」であるが、事前申し込みと団体の形式が必要である。“街角”は緊急な時、また、団体でなくても場所を必要とすればいつでも使えることとした。通常のオープン時間帯以外であれば自由に集まりが出来、アルコールも可能である。結果「千里グッズの会」「千里竹の会」若い父親の会「東丘ダディーズクラブ」写真サークル「あじさい」等が出来、活発に活動している。

アルコールを通常時間帯以外で解禁した結果新たな活動を生み出している。



写真—2 写真サークル「あじさい」例会

## 行 事

### i. たけのこ掘り

千里は竹の丘陵であった。公園には竹林が残っている。春を迎える時期に、この竹やぶで「たけのこ掘り」が出来ないだろうかと思いが上がった。市にこの旨を話し、竹やぶへの入所許可を取り、「たけのこを掘り」が実現した。当初は数十名であったが、その噂が伝わるには時間がかからなかった。毎年近隣からも参加者が増えつづけ、去年は300名を越す人数にも達している。掘り立てのたけのこを丸焼きし、特製味噌でいただく「街角方式」は好評で、スタッフの作る豚汁とのコラボレーションは地域住民に待たれる行事となった。「千里竹の会」はこの参加者で、荒れている竹やぶの現状を嘆いた人からの呼びかけで誕生した。もちろん行政との協働であり、竹林整備を市との委託事業で行っている。整備された竹やぶで「竹の会」の指導の下、立派なたけのこが収穫



写真—3 皆でたけのこ掘り

されている。近隣の老人施設や高齢者配食などに季節物として、無償提供している。

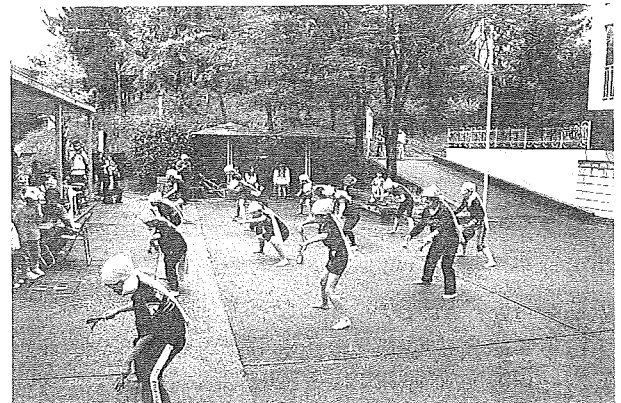
### ii. 開設記念行事

毎年10月には開設記念行事として立食パーティーを開催している。

当初は地域の皆さんに大切に育てていただいた感謝と“街角”の活動をもっと知ってもらおうとアドバイスをはじめ協力をいただいている大阪大学大学院建築工学科の皆さんと共に多彩なイベントを企画した。

学生と仮想課題についていろいろな提案を地域住民と話し合ったり、日々の“街角”の様子、来訪者の感想を出し合ったりと。又千里中央の再開発の説明と意見交換などなどであった。会を重ねるにしたがってアトラクションも小学生、中学生の部活発表の場になっている。「ソーラン」「吹奏楽」「バトントワリング」「和太鼓」などなどで賑わい、地域の人は子ども達の元気な姿も一緒に体験できる。

バーベキューコンロを囲んで缶ビール1缶から出発した開設記念パーティーだが今では生ビール飲み



写真—4 小学生たちのソーラン

放題が出来る盛況である。

最後はビンゴゲームを楽しんで、又来年もこの行事が出来ますようにと次の日から“街角”に来てくれるのである。もちろん当日の参加費はお気持ち料100円である。

### iii. 七夕笹飾り

竹の多い地域に居ながら、集合住宅で思うような七夕笹飾りが出来ない。いっそ街角でダイナミックにやろうか。と始めたのが街角の七夕笹飾りである。“街角”前の大きな笹に願い事をしてもらおう。短冊と筆記用具は街角終了後も出しておくと、どうだろう大人の人も童心にかえって一筆参加している。「大リーガーになれますように」「プロサッカー選手になれますように」「かんごく（看護婦？）さんになりたい」「3年生になっても大好きな△△さんといっしょのクラスでいられる様に」（中学生）「契約が成立しますように」（大人）「家内安全」「お父さんが早く帰ってきますように」枚挙にはいとまがない。

毎年6月の最後の日には笹を出し7月7日の夜に星に願いを届けている。この間、毎朝、笹に飾られた短冊を読み、ささやかな管理もする。



写真一五 七夕笹飾り

### iv. しめ縄づくり

正月も近い頃、一住区でささやかに行っていた「しめ縄づくり」を“街角”ではとの声が上がった。即実行が“街角”のよいところである。毎年この日が“街角”の歳納めの日となっている。

初めての人にも丁寧に教えてもらえるため、子どもの参加もあり、ここでも世代間交流がある。又数

人で大作が出来上がる。全てここでは協力体制が出来ている。竹の会制作の門松としめ縄で“街角”の正月準備も出来上がる。

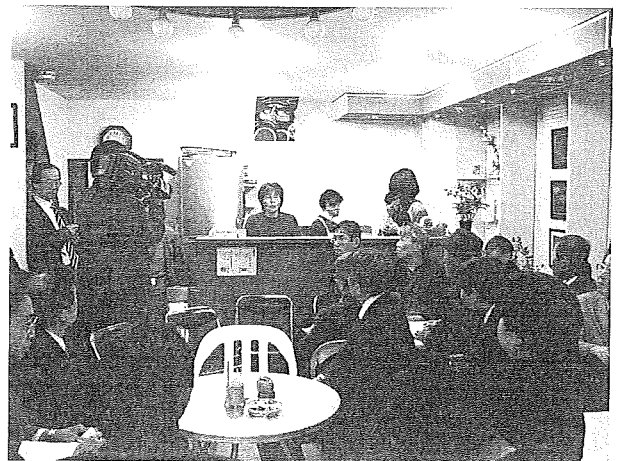
### v. その他

干し柿づくり、落ち葉遊びなど、出来る限り季節感を出せるように心がけている。季節の花は来訪者が常に提供してくれ、花をきかせたことはない。クリスマス飾り、正月飾り他季節の雰囲気作りも重要な要素と考えている。それにしても街には“街の名人”と評価できる人材が多いことか。

### 他地域との交流

メディアにのる機会が多くなると 見学、視察の申し込みがある。国内はもとより中国上海から二度、ニュータウンの先輩である英国からは研究者が二度来訪された。

このように多岐にわたる情報交換が出来、“街角”としてもよい勉強をさせてもらっている。



写真一六 洛西からの見学

### これからも

地域に根ざして安定した活動をしていくための課題は、場所の確保である。現在は家主の理解で安堵しているが、常に不安定な状態にある。行政の支援の下に場所の確保が出来れば日々の不安はなくなるであろう。千里ニュータウンが今後の更なる成長で安定した空間を確保できることを望んでいる。

高齢者が、入居間もない人たちが、子育て中の人、等等全ての人安心して生活できる町にしていけるには住民のコミュニティが大切で重要な事は言を待たない。その核に「ひがしまち街角広場」がなりうると自信を持って活動していく所存である。